

— 卷頭言 —  
“ステンレス車両 次の60年に向けて”

代表取締役社長  
西山 隆雄



私たちの世代は、かつてないほどの大きな技術変革の流れを享受してきた。デジタルカメラの普及はフィルムを駆逐し、写真を何枚撮ってもコストはほとんど変わらない。携帯電話の出現によって、電話は一家に1台から1人1台となった。インターネットは個人が世界中とつながることを可能にし、情報の国境を取り払った。そして現在、自動車がCASEによって100年に一度の変革を迎えようとしている。地球温暖化への危機感がエンジンからモータへの変化を促した。しかし、自動運転は、果たして交通事故による死傷者を減らすことにつながるのか。自ら運転操縦する楽しみを奪うことは、自動車メーカーにとってプラスなのか。

一方で、鉄道車両の世界は、最近はそれほど大きな変化はなかったように思える。電動機の制御方式の変革や直流電動機の交流化などによる省メンテナンス化、省エネルギー化など、個々の技術革新はあるものの、世の中に大きなインパクトを与えるほど大きい変化とは言えない。これは、鉄道車両が注文生産であるということと関係していると思われる。発注元から指定された仕様通りに設計・製造することに高い価値観を置いてきた結果、抜本的な変革の必要性を感じなくなっていったのではないだろうか。

日本初のステンレス車両である東京急行電鉄5200系が、1958年11月18日に、当社の前身である東急車輛を出場してから60余年が経過した。わずか3両から始まったステンレス車両は、現在までに累計15,000両に迫るまで普及した。現在では新幹線・特急形等を除く一般通勤車両の6割を占め、まさにデファクト技術と言っても過言ではない。60年以上前にステンレス素材の優れた特徴を鉄道車両に応用しようと考えた私たちの先輩は、今の私たちよりずっと進取の精神に富んでいたのではないだろうか。アメリカでは、1931年にはすでに102階建てのエンパイア・ステート・ビルが竣工していたわけで、当時のアメリカで初めてステンレス車両を見た日本人は大いに触発されたに違いない。

ステンレス車両で世界にはばたくという当時のパイオニア・スピリットは、当社にも不変のものとして引き継がれてきた。これに磨きをかけ、徹底した共通プラットフォームと多様なユーザーニーズに応えるオプションの組み合わせで、大幅なコストダウンを実現するという、当社の「sustina (サスティナ)」の考え方をもっと発展させていかなければならない。

「sustina」というブランド名は、環境に優しく持続可能の意である英語の sustainable (サスティナブル) と、地球を救う女神の意からローマ神話の女神の語尾-ina (-イナ) を組み合わせた造語である。60年後に「sustina」が文字通り地球を瀕死の温暖化状態から救う女神の役割を果たしていることを期待している。そのために、この機会にステンレス車両の「sustina」に至る60年を超える技術史を振り返るとともに、次の60年に求められる車両とはどのようなものなのかを考えることは意義あることだと考える。